

水俣から学ぶ

公害の原点と言われる水俣病は未だ多くの患者が苦しんでいます。地域も水俣ばかりでなく、しょくもつれんさに体中を切り刻まれるような痛みにありながら語り続け一千八年に逝去された杉本栄子さんの中でも網元が4軒ございますが、その一軒が私のうちです。そんないい村だつたにもかかわらず、魚が死に鳥が死に犬猫が死んだ中で、じいちゃんばあちゃんがとても多い村だつたんですね。百二十軒の戸数たいということで、手づかみでご飯を食べるようになりました。夕方帰つてきてみたら、母の姿が見えなくなつた。誰もが見えない。「母ちゃん!」って叫んでも返事もしない。母のところに行つてみたらブルブルブルフルフルふるえて、本当にびっくりするような顔をしていました。「マンガン病つて何だらうなつて聞きに行つたとき、それを説明してくれる人もなく、とにかく「親戚の恥さらしが。迷惑だからこの村を出て行け」と言つたのは親戚の人たちでした。父が言つには「いじめる人は変えられんとばい。自分が変わつて生きていかんば、人がいちいち言うのを腹を立てるようじや、一丁前じやなかばい」と言つてくれて私を育ててくれましたが、人様より早く死ぬのならば、いじめ返しをして死にたかつたですと思つておりました。その中で「いじめ返しをしたい」という私の言葉には父はとても怒りました。「人として生まれたからには、やつていいこととやつてならないことがあるんだ」。それは、「この村から出て行け」とか、崖から突き落としたり、お米も売つてくれなかつたりする中で、父親は「そんなことをされて辛かばつてん、されたことを他の人にもすれば、他の人も自分たちと同じように辛かじやなかろうか。

それならば自分たちがこらえて、いじめ返しをしちゃならん。人としてやつてならないことはそんなことだ」と。いじめ返しをしなかつたことが私の宝物になつています。】と。遺言は【苦しゅうして苦しゅうして、もう全部許すことにした。チッソも、病人をさげなんだ人々も全部許す。人を恨むことはやめた。このつらい病気は誰にも病ませたくない。あらゆる人々の罪していく】と。差別に苦しみ、病に痛めつけられた栄子さんは菩薩様になられたと言います。あんなりようしょんばかりの作家、石牟礼道子さんは栄子さんは菩薩様になられたと言います。あらゆる人々の罪を背負つて許し、そして死を迎えるのは仏様の言葉でありました。女漁師であり学校へはほとんど行かず、哲学書一冊読まなかつた人です。ただ、ただ、父親から受け継いだ言葉を守り続けたといつてもいいでしょう。水俣病は私が引き受けたと逝つた栄子さん、大きな大きなこれ以上の慈悲心があるでしょうか。昨年の大震災で亡くなられた方々からも私たちと同じ言葉を投げかけられているような気がします。【津波や地震は私達が受けた】と。

だからこそ残つた私達はそれらの人々を忘れてはならないと思います。どんなに時が流れても私達の記憶からこれらの人々や場所を消してはならないのです。

亡くなられた方々からの声があなたには聞こえますか。だからこそ今ある生をいのちを、軽んじても軽んじられてもけつしてならないのです。